春風秋雨

江利川毅 県立大理事長

総理の施政方針演説

知行二つにして一つ

去る2月12日、国会で安倍総理の施政方針演説が行われた。毎年1月に始まる通常国会での総理の演説を施政方針演説と言い、臨時国会での演説を所信表明演説と言う。総理演説は閣議決定され、内閣の基本方針となる。

私が総理官邸で勤務したのは、内閣参事官として1985年8月から3年間、首席内閣参事官として98年1月から3年間である。中曽根内閣、竹下内閣、橋本内閣、小渕内閣、森内閣の下で仕事をした。総理官邸での仕事は多様であるが、その一つが総理演説作成の事務的サポートである。

総理演説は総理ご自身が思いを込めて作成に当たられる。冒頭や結びは総理の政治哲学や国民へのメッセージが述べられることが多いが、それをどのような言葉でまとめるか、総理の政治信条やお人柄が表れる。各論についても、外交を先にするか内政を先にするか、その中の課題については述べる順序、表現、文量もしっかり吟味する。

官房長官をはじめ多くの人が意見を寄せ合う。総理ごとに政策の旗印に特色があり、政権の成果に応じてその内容が深められ拡大していく。総理のリーダーシップにも個性があり、今は多分「安倍流」とでもいうべきやり方で作成されているものと思う。

総理演説は内閣の基本方針となるので、各省庁の重要施策を盛り込んでほしいとの意見が寄せられる。各省庁の士気の面からも、その後の法案審議や予算獲得の面からも大事な場面なのである。各省庁からの意見を、内閣の方針に照らして取捨選択しながら、各論のパーツパーツの下書きを整理する。

総理演説についての思い出も、総理ごとに様々である。中曽根総理からは直筆のメモが下りてくる。「黄金律」とか「天上天下唯我独尊、山川草木悉皆成仏」とか、思いもよらないような言葉とともに、哲学的な思索に裏付けられたご自身のお考えを示された。小渕総理は「建設的な楽観主義」という言葉を使って、「コップ半分の水を（中略）まだ半分も残っているじゃないかと考える意識の転換が、いままさに求められている」と述べられた。こういう大胆な発想は小渕総理だからこそできたのだと思う。

今回、安倍総理は「知と行は二つにして一つ」と吉田松陰先生の言葉を引用して行動、改革の断行を訴えている。「知行合一」は王陽明（中国明代の儒学者）の考えである。朱子学で有名な朱子（中国宋代の儒学者）は「先知後行」を説いた。まず知ってその後に行うというのは常識的な考えである。しかし王陽明は、知は行の始め、行は知の成る、知と行を分けて二つのこととしてはならないと、知行合一説を唱えた。

私なりの理解では、正しき認識に至ってから行うということは、正しい認識に至るまでは行わないということになり、行わないことの正当化に使われてしまう。陽明はその弊害と実践の大事さを指摘したかったのだと思う。

「講孟箚記（こうもうさっき）」という吉田松陰の著書がある。箚記とは、読書して得たところを随時に書き記した書という意味である。松陰は野山獄で囚人に孟子を講義し、引き続き自宅で講義したが、その時に書き記したものである。

安倍総理の引用部分は、自宅での最初の講義の時のもの。松陰は「知と行と二つにして一つ、一つにして二つ、（中略）行いを廃した知は真の知ではなく、知を廃した行いは実の行いではない。知行二つにして一つ、先後また相俟（あいま）ちて済（な）すことあるなり」と説く。

松陰は知行について先後か合一かと対立的にとらえず、時に応じて先後も合一もあると言う。朱子や王陽明のような偉大な先人に学んでも鵜呑みにすることなく、自分が完全に納得するまで考え抜いて自分のものにしていく。このような松陰の姿勢に、われわれもまた学ぶべきだと思う。

（注）本文を書くに当たって「講孟箚記（吉田松陰、近藤啓吾全訳注、講談社学術文庫）」などを参考にした。

（次回は16日付）